

第VII章 まとめ

第1節 香美市の縄文時代早期遺跡について

高知県内で縄文時代早期の遺跡として知られるのは2006年度現在46遺跡であり、西南四国と四万十川及び仁淀川流域の県西部に集中している（木村1978・1987・1995、松村・畠中2003、畠中2005・2006、兵頭2007）。県西部から県中部そして東部に目を転じると、早期遺跡が集中するのは香美市域及び吉野川上流域であって、とりわけ香美市域では断続的に発掘調査が行われたため、高知県内で最も資料の蓄積が進んでいる（第86図）。

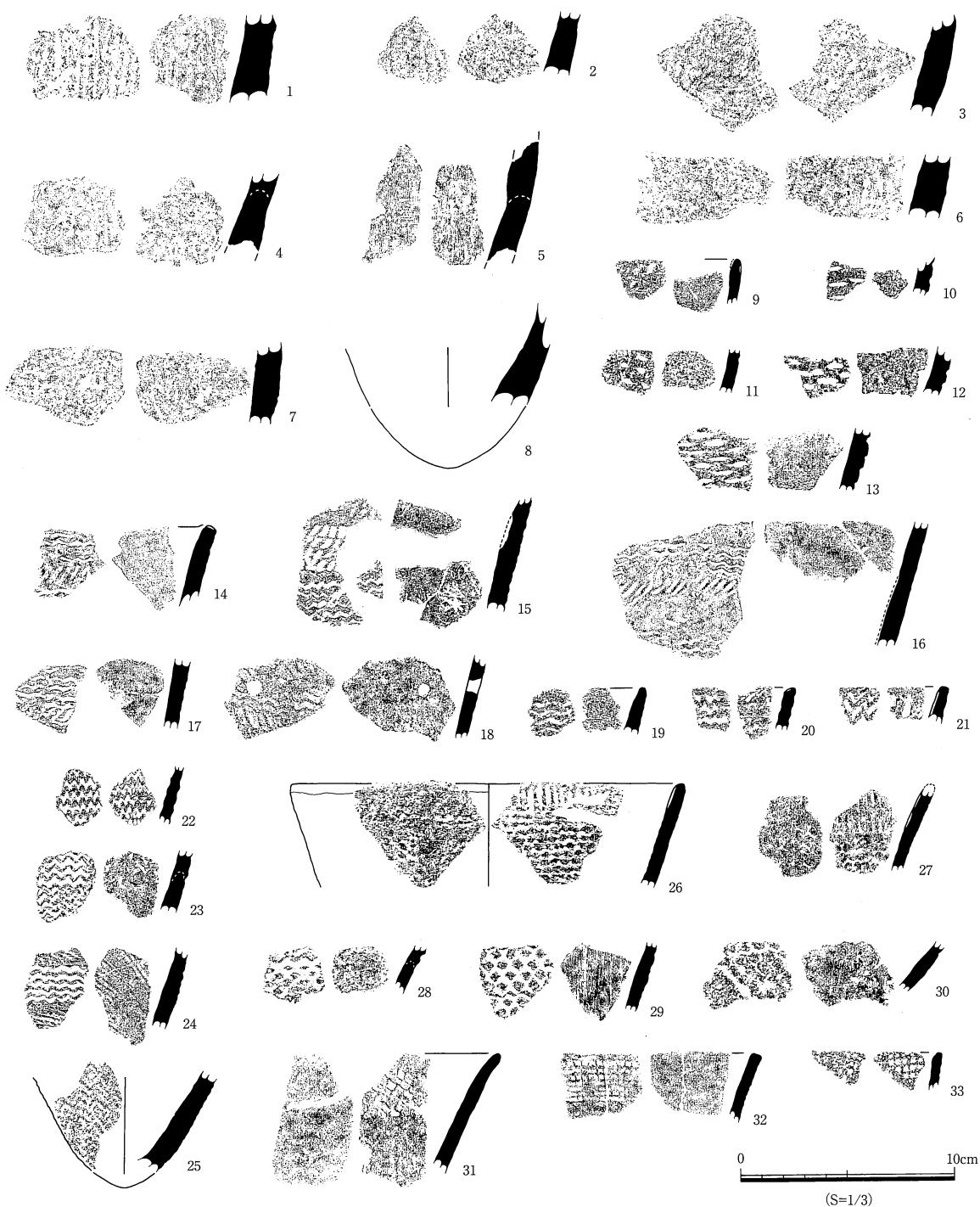
香美市域を流れる主な河川は、吉野川の支流である穴内川、国分川上流域の新改川、そして物部川であるが、穴内川水系には飼古屋岩陰遺跡（森田1983）、新改川水系には開キ丸遺跡（小林2002）、物部川水系には町田堰東遺跡（畠中2006）、刈谷我野遺跡（山崎2003、松本2005a・b・2006a・b・c）・東下タナロ遺跡（松本2005a・2006a）、そして美良布遺跡（出原1991、松本2005a・2006a）が所在するため、香美市に所在する縄文時代早期遺跡はいずれの河川流域にも所在することが明らかとなっている。また、穴内川を下れば吉野川を通じて瀬戸内・近畿方面へ、新改川・物部川を下れば西南四国～九州そして太平洋へ繋がっていることは、縄文人の動向を探る上で極めて興味深い地勢である。



第86図 香美市縄文時代早期遺跡位置図

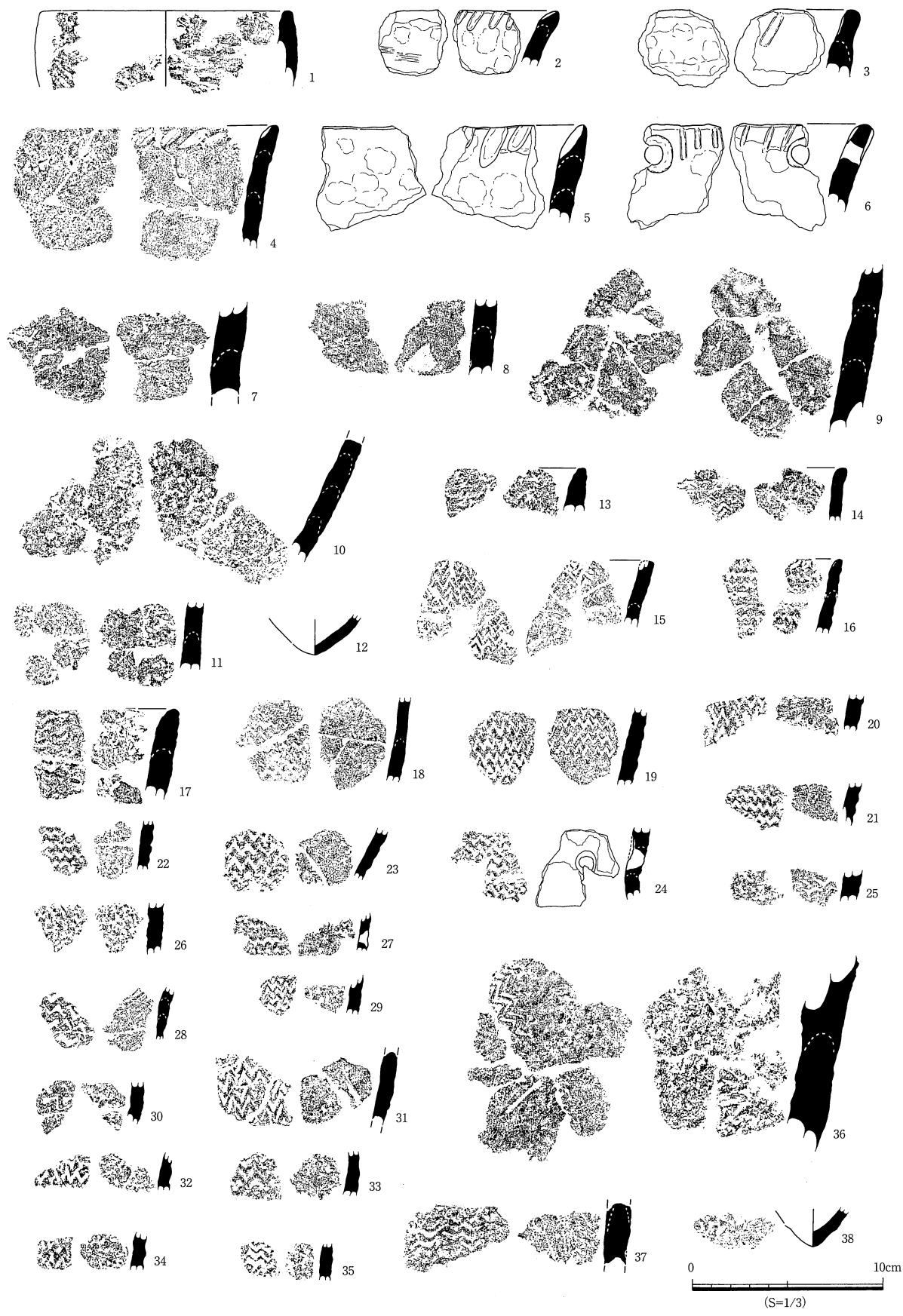
飼古屋岩陰遺跡（第87図）

穴内川水系に立地し、下流の徳島県吉野川流域には縄文時代早期の宝伝岩陰遺跡（森・松藤1999）が所在する。1～8が無文土器であり、胎土中の纖維量が刈谷我野遺跡出土の無文土器に比べると少なく、器厚も薄手である。9～33が押型文土器であり、9～13がネガティヴ楕円押型文、14～18が山形文+短沈線文ないしは格子目文、19～25が山形文、26～30がポジティヴ楕円文、31～33が格子目文である。

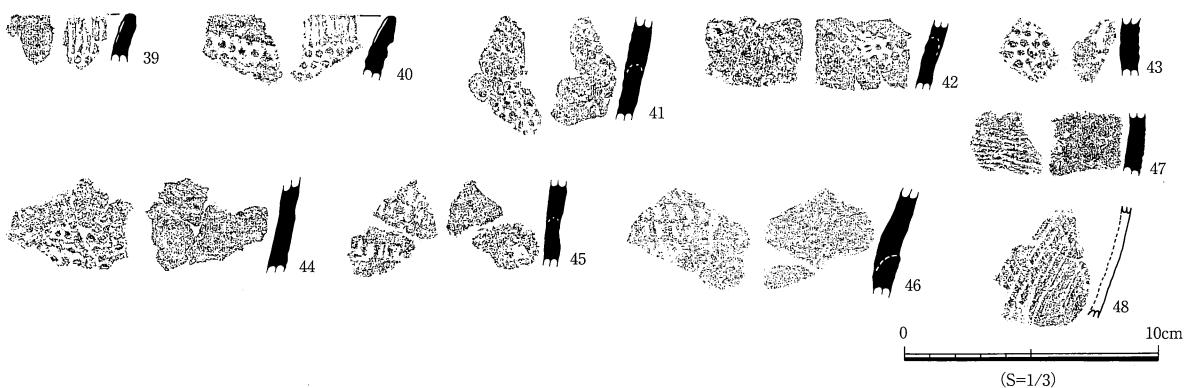


第87図 香美市土佐山田町 銅古屋岩陰遺跡出土土器

ネガティヴ橒円押型文が高知県内で出土し、今まで保管されているのは銅古屋岩陰遺跡のみであるが、香美市土佐山田町田堰東遺跡において採集されたという話もあり、南四国にはネガティヴ押型文の伝播が確実にあったものと考えられる。このネガティヴ橒円押型文及び山形文+短沈線ないしは格子目文は近畿を中心に分布しており、前者は神宮寺式、後者は神並上層式として理解でき、無文土器及び山形文・ポジティヴ橒円文等に先行する土器型式として位置付けられる。



第88図 香美市土佐山田町 開キ丸遺跡出土土器①



第89図 香美市土佐山田町 開キ丸遺跡出土土器②

開キ丸遺跡（第88・89図）

国分川水系に立地し、下流の南国市には旧石器時代～縄文時代早期の遺跡として知られる奥谷南遺跡（松村・山本2001）が所在する。1～12が無文土器であり、1は口縁部無文、2～6は口縁部有文である。1は直立しており、器面調整は二枚貝条痕である。2～5は外傾し、器面調整はナデで、内面に左斜行文を有する。6は外傾すると考えられ、器面調整はナデで、内面に左斜行文及び外面に直行文を有する。そして焼成前穿孔を有する。

13～46が押型文土器であり、13～38が山形文、39～44がポジティヴ橜円文、45・46が格子目文である。山形文はいずれも胎土に纖維を混入させている。13～17がその口縁部であるが、16のみ口縁部内面に左斜行文を有し、柵状文は見られない。ポジティヴ橜円文はいずれも胎土が砂質である。39・40がその口縁部であるが、いずれも口縁部内面に柵状文を有しており、黄島式に相当する。山形文主体であることと口縁部文様に差異が認められることから、押型文土器には時期差を考慮しなければならない。

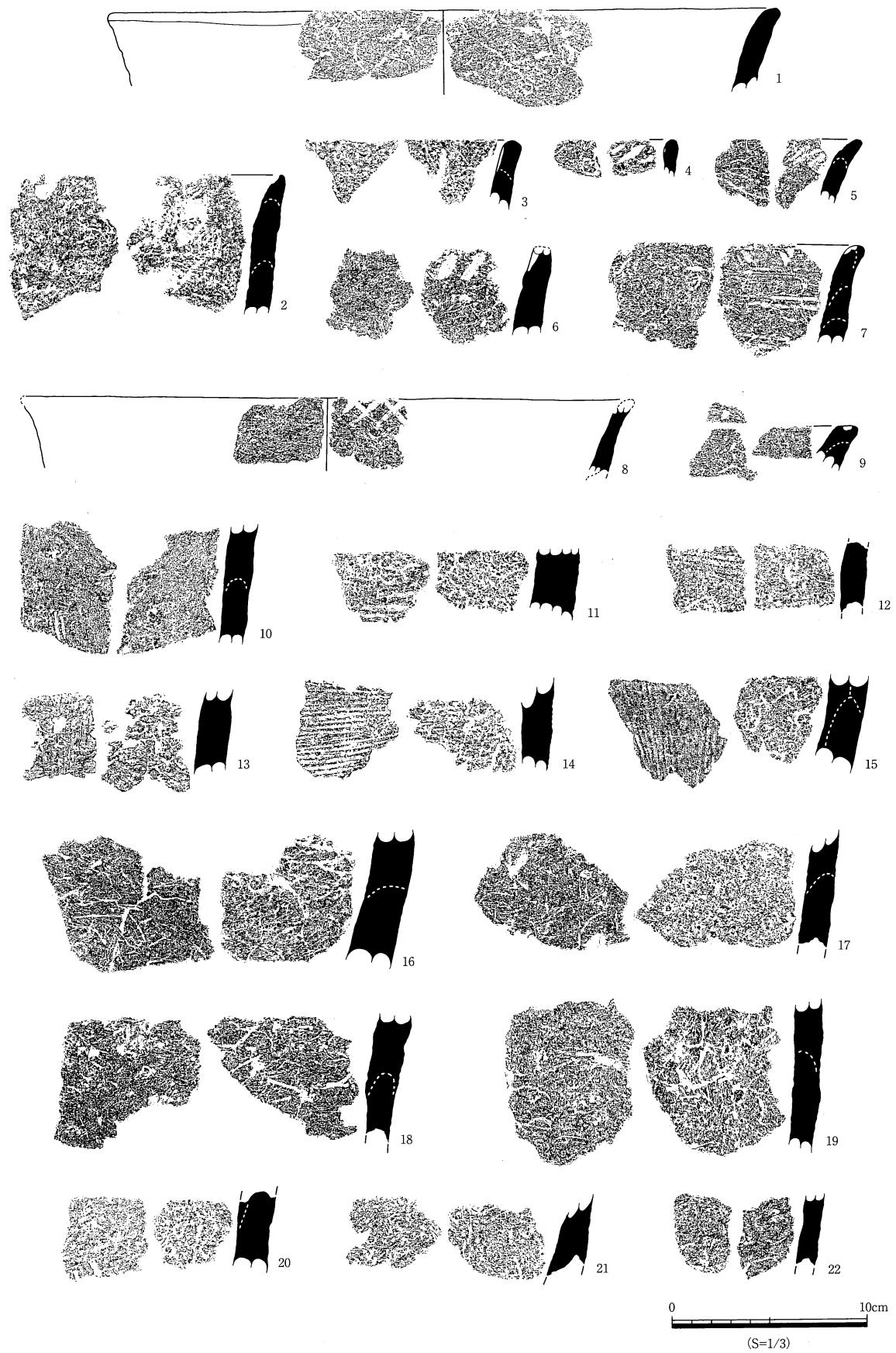
47は撚糸文土器、48は条線（痕？）文土器である。いずれも黄島式より古い段階に伴うと考えられる。

町田堰東遺跡（図無し）

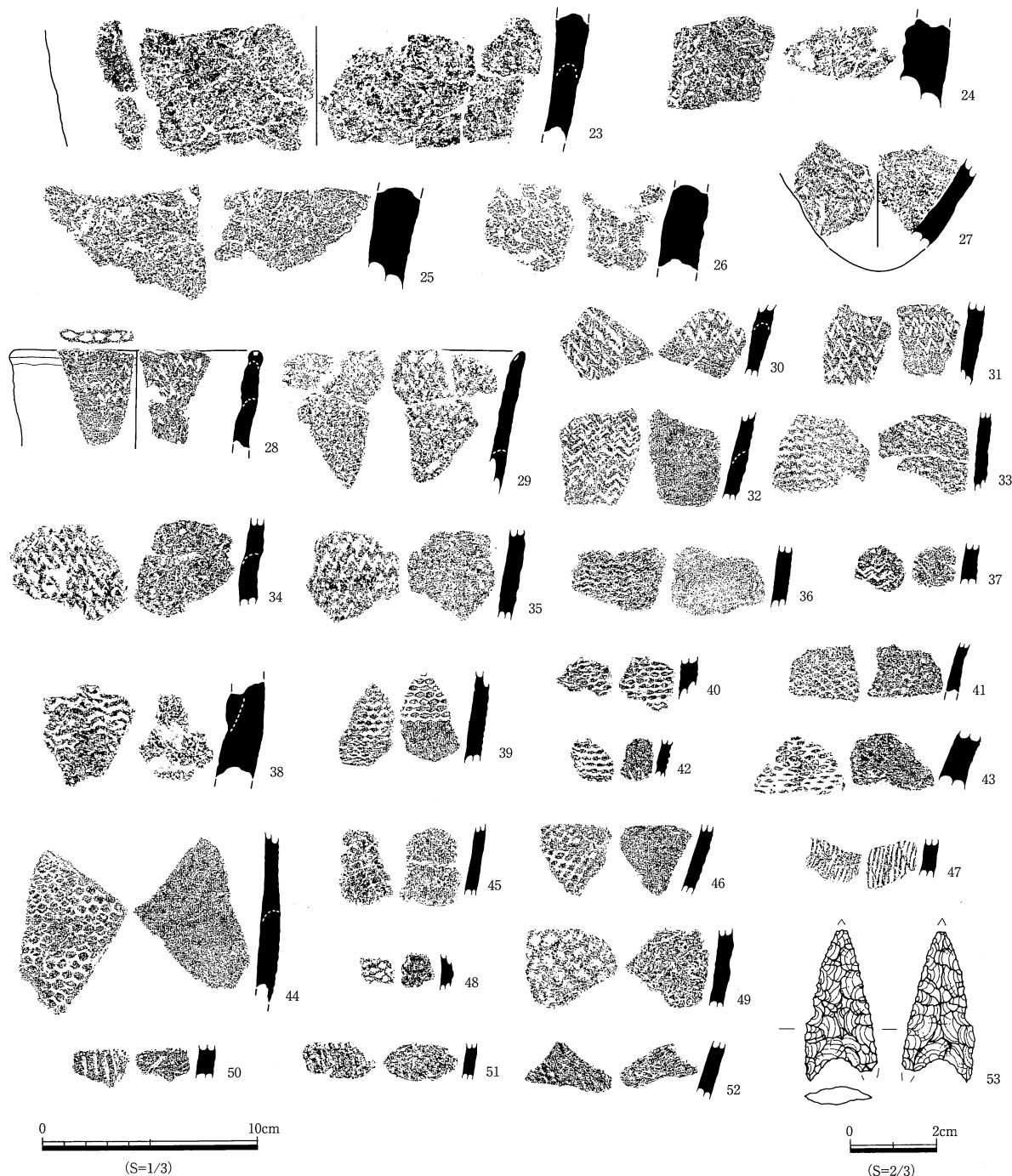
物部川下流に位置する遺跡であり、ネガティヴ橜円文が表面採集されたという。実測図は残されておらず、遺物自体の確認もできなかった。

刈谷我野遺跡（第90・91図）

物部川中流に位置する遺跡であり、図示した資料は試掘調査で得られたものである。1～27は無文土器であり、1～9が口縁部、10～27が胴部・底部である。口縁部はいずれも外傾傾向であり、口縁部文様は1・2には認められず、3～8は内面に口縁部文様を有する。8の口縁部文様は特殊であり、格子目状文である。9は口縁部上面に円形刺突文を有する。胴部は10～15の器面調整が二枚貝条痕である他はナデであり、器厚が厚いものが目立つ。また、27は底部であり、尖底を呈する。



第90図 香美市香北町 剣谷我野遺跡試掘調査出土遺物①



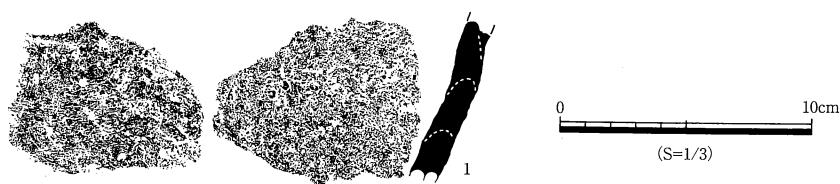
第91図 香美市香北町 剣谷我野遺跡試掘調査出土遺物②

28~49は押型文土器であり、28~38が山形文、39~46がポジティヴ樋円文、47が複合鋸歯状文、48・49が格子目文である。山形文のうち28・29は口縁部であり、28は口縁部上面に刺突を、29は口縁部内面に直行文を有する。30~38が胴部であり、山形文にもシャープなものとそうでないものの2種類が見られる。興味深いのは38であり、器厚が他のものに比べて極めて厚く、胎土に纖維を混入させる。無文土器と山形押型文土器の折衷として考えたい。ポジティヴ樋円文も長樋円のものと比較的整った樋円のものに分けられそうである。50~52が撲糸文土器であり、いずれも外面に撲糸文圧痕を施す。

53は石鎌であり、脚部が極めて短く、左右からの剥離が大きく整然としている。石材はサヌカイトである。

美良布遺跡（第92図）

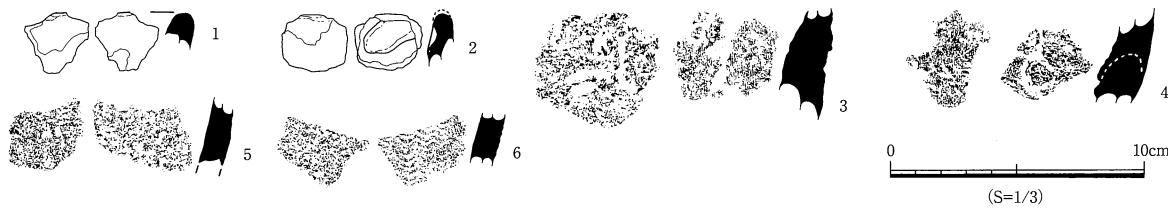
物部川中流に位置する遺跡である。第1次美良布遺跡の調査時に表面採集された。胎土中に纖維を含み、指頭圧痕が顕著である。よって、早期に位置付けたが、刈谷我野遺跡の無文土器と一線を画す。



第92図 香美市香北町 美良布遺跡表面採集土器

東下タナロ遺跡（第93図）

物部川中流に位置する遺跡である。表面採集品であり、1～5が無文土器、6が山形押型文土器である。無文土器は刈谷我野遺跡出土のものと全く同じであり、町内に刈谷我野遺跡と同時期の遺跡が、まだ他に所在する可能性を示している。



第93図 香美市香北町 東下タナロ遺跡表面採集土器

第2節 刈谷我野遺跡の無文土器について（第94図）

『刈谷我野遺跡Ⅰ』において、SK 2出土の無文土器・有文土器について分類を行った。本報告書では、大筋はそれに準拠するが、新しい分類項目を設ける必要が出てきたため、分類基準が異なっている。以後は本報告での分類を最終的なものとし、それに基づいて論を進めることを予め承願いたい。

無文土器についてはA群として分類した。B群以降は押型文土器などの有文のものを意味する。A群は口縁部文様を有さないもの（1：A1群）と口縁部文様を有するもの（2：A2群）に分けられる。本報告書におけるA1群の出土点数は82点であり、第3層出土が32点、第4層出土が29点